

書評

齊藤寛海，山辺規子，藤内哲也編著
『イタリア都市社会史入門 12世紀から16世紀まで』

評者：中谷 惣

I

中世においてイタリアはヨーロッパで最も都市化が進んだ地域の一つであった。イタリア都市はこれまで、そこで高度な自治が実現され、商工業が発展し、ルネサンス文化が開いたという点から注目されてきた。本書はこれに対し、都市社会における様々な現実を目に向け、都市に生きる人びとの日常のあり方から、つまり社会的な視座から、イタリアの都市像を描き出そうとするものである。以下では、各章の内容を概観した上で、本書の持つ意義と疑問点を指摘したい。

II

第I部、都市のかたちとしくみ

第I部は、イタリア諸都市の物理的構造や政治・経済の仕組みを対象とする。

第1章は、中世の都市的環境の成立過程について、都市と農村の定住地の変遷に注目して明らかにする。ローマ都市から中世都市への連続性の問題、10世紀に始まるインカステラメントという農村部の城砦集落の展開、12世紀の都市による農村領域への拡大・支配の諸相が論じられ、都市成立後にも、都市社会内部に常に都市＝農村関係が存在していたことが指摘される。

第2章は、都市内部の空間に目を向ける。市壁や塔が持ちえた社会的意味、そして道路、広場、橋などのインフラ、さらにはゴミや汚物をめぐる衛生問題といった日常の生活環境が検討される。都市環境の問題がそこに積極的に介入する都市の公権力としてのコムーネと結び付けて論じられている。

この公権力としてのコムーネに関して、その政治体制の変容を追ったのが第3章である。一般的な概説では、都市貴族からなるコンスル制の成立、他都市出身の行政官ポデスタの統治、民衆勢力ポポロの台頭、シニョーレによる単独の支配、領域国家の形成と、都市の政治的変遷が図式的に示される。本章はそうした流れを全体とし

ては描きつつも、制度移行における地域的差異、表面的な体制の変化には還元しきれない本質的な諸問題をも、近年の研究動向を踏まえて明らかにする。

第4章は、イタリア都市の商業活動に焦点を当てる。イタリア商人が、十字軍やレコンキスタなどの政治情勢とともに、羅針盤やガレー商船などの新たな技術を取り入れつつ、東地中海、西地中海、北西ヨーロッパへと覇権を広げていった状況が描かれる。海外交易でもたらされた商品や富の地域社会に与えた影響の大きさからは、イタリア都市社会を海外の問題と関連付けて考えることの重要性が示唆される。

第5章は、イタリア都市の対外進出を扱う。ジェノヴァ人は居留地の確保や関税免除などの特権を獲得しつつ、広範な地域に拠点を築いていた。この支配形態が「点」(拠点)と「線」(ネットワーク)とするならば、ヴェネツィア人の領土支配は「面」であり、その影響力は商業拠点だけでなく、その後背地にまで及んでいたという。

第II部、都市のくらしと文化

第II部は、都市社会内部での人びとの日常とそれを規定する諸要素を検討する。

第6章では、イタリア都市がヨーロッパにおいて俗人文化、俗人教育において先進的な位置にあったことを大学という文化的中心の存在とともに明らかにする。特に法学が発展したボローニャにおいて、学生や教師の文化的ダイナミズムが都市を支えていた状況が描かれる。

家族の問題を扱う第7章は、家父長制、男子分割相続制、結婚時の嫁資の慣行を取り上げる。ここでは法規範史料から制度的特徴を示すだけでなく、近年の成果に基づき、社会的に不利な立場にあった既婚女性や寡婦の存在感ある活動の実態が示される。

第8章は、都市に住む人びとが、どのようなところに住み、何を食べ、どのような服を着ていたかという生活文化を対象とする。衣・食・住に関する情報が提示されるだけでなく、それらが当時の社会で持ちえたステータス・シンボルとしての特徴も論じられている。

第9章は、キリスト教文化や信仰との関係において都市社会を捉える。中世都市の信仰は、教区民としての洗礼やミサへの参加だけでなく、説教、兄弟会など社会的・集団的な信仰活動の特徴としていたことが指摘される。また都市の守護聖人への崇拝からは、信仰が都市への帰属意識を高める働きを有していたことも明らかにされる。

イタリア都市社会の聖俗の絡まりあいは、第10章の説教でも取り上げられる。家族と性、平和、公益質屋をテーマとする説教からは、説教師のキリスト教理念の伝道者としての存在とともに、都市政治のなかでの彼らの重要な役割が見出される。説教は聖俗が絶妙に関係があった当時の政治文化のあり様を示しているという。

第11章は、人びとの社会的な結びつき（ソシアビリティ）のあり様を検討する。都市の人びとが、地縁共同体、同職組合、兄弟会など多様なレベルの共同体に重層的に帰属して社会生活を送っていた実態、そしてそうした日常的な結合関係が、祭りという非日常の場において表出され、そこで確認・強化されていた状況が明らかにされる。

第12、13章は、ルネサンス期へと対象時期が移る。ルネサンスといえば芸術であるが、第12章では、そのルネサンス文化を背後で支えた、君主、都市政府、教皇、兄弟会などのパトロン活動について、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノなどの事例から明らかにする。パトロンが権力を誇示し、自身の地位を正当化するため芸術パトロネイジを行っていた様子が特に指摘される。

第13章は、近世イタリアにおいて国家の政治的、経済的、文化的な中心地となっていた、君主とその一族およびその従者からなる宮廷を検討する。宮廷内部の構造や儀礼についての詳細とともに、都市内に位置する宮廷が、雇用創出や都市景観の変容、芸術の振興のために、都市に対して大きな影響を与えていた点が指摘される。

III

本書は、イタリア史のみならず、都市史やヨーロッパ社会史に興味を持つ者に広く開かれた入門書であり、今後、各分野での参照事例として有用な存在となるに違いない。しかしそうであるからこそ、いくつか気になる点もあった。

まず挙げられるのが研究史に関する記述の乏しさである。第1章や第3章、第7章などでは、各分野の研究史が整理されているが、その他の章でも、それぞれのテーマがどのような研究の流れを持ち、どういう論点が研究史上、問題とされ克服・再考されてきたのか、そして今、何が問題とされているのかと言及されるべきであったように思われる。もちろん各章は近年の研究成果を生かした内容になっているが、そうした点が明示されることで、イタリア都市社会史が持つ新しさや可能性、そこに内在する諸問題が一層明確になるように思われる。

イタリア都市社会史の秘める可能性という点で、もう一点指摘したいのが史料の問題である。中近世のイタリア都市がこれほどまでに、人びとの日常に接近して描かれうるのは、他のヨーロッパ諸国に比類を見ない豊富な史料のためである。そして、これまで見逃されてきた史料に目を向け、また手垢のついた史料を斬新な視点から読み直すといった、史料へのまなざしの刷新のためでもある。各章における記述のなかで、史料状況や史料に向かう歴史家の現場の様子がもう少し詳しく言及されれば、

本書がイタリア都市社会を概観する書ではなく、都市史やイタリア史を志す者への手引書として、より魅力ある存在となっていたように思われる。

次に本書の構成全体に関わる点について触れておきたい。本書は政治史や経済史ではなく社会史的な視点で都市を描くことを目標としている。確かに、第Ⅱ部の第7～11章では、本書の視座である「日常生活に密着した、より現実的な視点から、都市社会の多様な側面」(9頁)が描き出されている。しかし、それ以外の章、特に第Ⅰ部の多くの章や、第Ⅱ部の一部では、日常のレベルから汲み上げられたとは言えない内容が多く存在する。つまり、本書には一般的な社会史または狭義の社会史以外の内容、たとえば政治・経済の大きな流れを示す内容が多く含まれている。しかしこうした構成は、近年の社会史を取り巻く環境においては、むしろプラスに働くように思われる。1970年代後半以降、社会史研究は事件史的政治史やマルクス主義パラダイムへのアンチ・テーゼとして急速に拡大してきたが、近年、社会史におけるテーマの拡散やたこぼれ化を懸念する声があがり、その克服のために個別の事象を全体の中に位置づける必要性が盛んに叫ばれている。他方で、政治史や経済史の分野でも、従来の戦後歴史学の視点ではなく、「社会史を経過した政治史」あるいは経済史という視点の重要性が繰り返し指摘されている。

こうした中で、都市の空間や政治、経済を広く論じた第Ⅰ部と、都市社会の現実を細かく描く第Ⅱ部という2部構成は意味深い。編者もこの「二つの歴史像を有機的に結びつけていくことで、中世イタリア都市社会の歴史的な特質や意義」(12頁)を明らかにすることができるとしている。ただ残念に感じられたのは、都市の構造面に力点をおく章の中での社会的現実への言及の少なさと、逆に日常生活に焦点を当てた章の中での政治的、経済的文脈への言及の少なさである。確かに、第2章では都市政府の生活環境への関与の諸相が描かれており、第10章や第11章でも説教や社会的結合と、都市政治との関係性が注目されている。しかし、他の章では、そうした関連への記述はあまり見られない。また、第Ⅰ部の章と第Ⅱ部の章との間で相互の言及もほとんど見当たらない。各章はそれぞれの分野を専門とする研究者によって執筆されており、その記述は詳細で正確であるが、その一方で、各章間での接点が見えにくい状況になっている。たとえば、第Ⅱ部の各章において都市の人びとの日常とそれを取り巻く諸要素が描かれる中で、第3章～第5章で示された政治構造の変容や都市商業の発展との関連性をもっと詳しく示されるべきであったように思われる。そうすることで、本書が、都市社会の具体的な事象から、中世イタリアという時代と地域の全体的な特質を描き出すものである点、そしてさらに、本書の内容が社会史の

分野にとどまらず、社会の現実を出発点とした政治史、経済史または法制史の分野へと広がりを持つものであるという点が読者にもはっきり伝わるであろう。

1970年代～80年代に我が国の中世イタリア史をリードしてきた清水廣一郎の『イタリア中世の都市社会』で論じられているのは、市民権、公証人、嫁資、商人の活動などである¹⁾。それからわずか20年弱。中近世イタリアに関して、これほどまでに多様な都市社会の現実が

描かれるようになるうとは、だれも想像しなかったであろう。本書は近年の我が国における中近世イタリア史の隆盛を顕著に示すものである。そして間違いなく、今後の同分野の深化と多方面への広がりを導くものでもある。

注

1. 清水廣一郎『イタリア中世の都市社会』岩波書店、1990年。